

吉志部に残る「人身御供」

の記憶

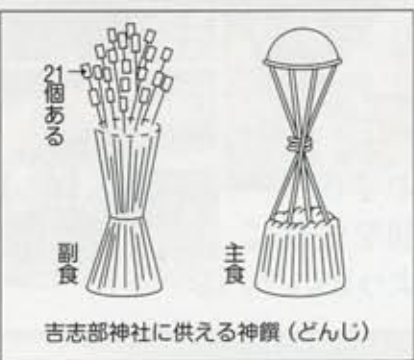
新山ひろし



この稚児たちの行列は、人身御供を再現したものだろうか
(吹田市立博物館：提供)

吉志部神社の奇祭 「どんじ祭り」を考える

吹田市立博物館でのことである。吉志部神社の「どんじ祭り」が再現されており、頭に「さんだわら」を乗せた少女の展示が目に入った。これ、どこかで見たことがある。もしかして、この少女たちは、神に捧げられる「人身御供」なのではないだろうか。というのも、以前に、大阪の西淀川区にある野里住吉神社の「一夜官女」という人身御供の伝説取材したことがあり、その少女たちの姿としても似ているたのである。「どんじ祭り」は、人身御供の記憶を留める祭なのだろうか。今回は、吉志部



吉志部神社に供える神饌(どんじ)

「どんじ祭り」は 「人身御供」の 祭りだろうか

そもそも、「どんじ祭り」とは、どんな祭りなのだろうか。この祭は、毎年、10月17日に吉志部神社で行われる秋の収穫の祭と言われる。旧村である東村・小路村・南村の旧家七軒でつくった「どんじ講」があり、「どんじ祭り」のしきたりが守られてきた。「どんじ」とは、「当地」、つまり、当番である。その年の当番に当たる主人が神饌(神様の食事)を作る役割を担う。主食は、半球状のむし米、副食は、なす・栗・柿を皮のままで長方形に切って、七個ずつ21本の細い竹の串に刺したものである。この神饌のこともなぜか「どんじ」と呼ぶ。「どんじ」とは「生贄」ということなのだろうか。四人の少女が正装し、頭に「さんだわら」をのせて行列する。この4人の少女たちが人身

「一夜官女」は 人身御供の物語である

「どんじ祭り」に比べて、より明確に人身御供の記憶を残す野里住吉神社の「一夜官女」の祭事を見てみることにしよう。野里住吉神社では、神饌に川魚が使われる。今は埋め立てられた中津川の堤にあつたことからだろうが、生の魚を突き立てて献するのが、とても「生贄」的である。「どんじ祭り」と同じように、当番が主人となって食事を供し、祭を進行する。その年の主人を「当矢」という。矢を射て、矢が



御供の名残であると思われる。

当たった家が娘を人身御供として提供したという言い伝えがある。祭りでは、頭の上に「さんだわら」と唐櫃(からびょう)を乗せた少女たちが行列する。ここでは、人身御供が明確に意識されている。

昔、暴れ川である中津川の堤にある野里では、洪水に襲われ凶作が続く毎年、七人の少女が唐櫃に入れられ、生贄として神に捧げられた。その「人身御供」の記憶を儀式として再現しているのが「一夜官女」の祭なのである。また、野里では、豪傑、岩見重太郎が現れて、少女に変わって唐櫃に入り、大蛇を退治するという伝説が残されている。この岩見重太郎

の物語にとっても似た伝説が、実は、吉志部神社の側の釈迦ヶ池にも残されている。

吉志俊守の 大蛇退治の物語

釈迦ヶ池は、七世紀の頃、行基によって造られた池だが、いつからか大蛇が暴れまわり、村人たちは、毎年、当番で娘を人身御供として蛇に捧げていた。ある日、吉志俊守が釈迦ヶ池で足を洗おうとしたら、小さなへビが指先に食いついてきた。俊守が、その蛇を切り離すと、突然、黒雲が立ち込め、そこに大蛇が姿を現した。俊守が弓を放つと、雷が鳴り、三日三晩雨が続き、池



釈迦ヶ池 右側にあるのは池をまたぐ名神高速道路

は静かになった。この釈迦ヶ池における大蛇の物語は、登場人物と場所は違おうが、野里住吉神社の一夜官女の物語とほとんど同じである。大蛇とは、どうやら、暴れまわる水、自然の猛威を象徴化しているようだ。ところで、吉志俊守は、渡来人と言われる吉志一族の祖先である。この物語は、吉志一族の、この土地に対する貢献も表現していると考えられる。そして、この物語を「どんじ祭り」を通して、「人身御供」の記憶と共に保存しようとしてきたと考えられる。

アジアでは 動物を生贄にするのは 自然のことだ

まず、思いつくのは、沖縄の与那国島の夏祭り。地元の人しか参加できない奇祭だが、次の日、浜辺に牛の首が流れているのを発見した。これには、びっくりした。生贄の祭祀が行われていたのだ。そう言えば、吹田にも「牛ヶ首池」というのがあり、雨乞い神事と関わっていると聞いた。また、インドのカルカッタのヒンズー教のお寺では羊が何匹も何匹も儀式として屠畜されていた。カーリー神に捧げられるという事で羊を殺し、神と共に食べる事が許されるということだった。あるいは、大阪鶴橋では、祭祀用として日常的に豚の頭が陳列され売られている動物が神に捧げられること

人身御供の記憶を とどめることの意味

さて、日本にも、吉志部にも、人身御供はなかった！と考えるとみよう。人身御供はなかったが、古代からの記憶として存在していた。そして、その記憶を神事とすることで、人々は神と共に食べることの喜びと興奮を再現してきた。人ではなく動物を生贄とすることで、「人身御供」の儀式化に成功したのである。それは、古墳に生きながら人を埋めていた習慣をやめ、埴輪を埋めた歴史と対応することも考えられるだろう。今も、人々は人身御供神事によって、

原始の衝動を蘇らせている。祭りとは、古代人のワイルドな衝動を自身の体の中に発見することに違いない。吉志部神社の奥田宮司に「今年もどんじ祭りは、行われますか」と声をかけると「もちろん。10月17日に、例年通り行いますよ」と宮司は力強い言葉で応えられた。再建中の本殿が秋の光をまぶしく照りかえしていた。

■参考文献

- 「怪異の民族学」 河出書房新社 赤坂憲雄他
- 毎日新聞「わが町に歴史あり 野里住吉神社編」 松井宏員記
- 「雨の神」 高谷重夫著 岩崎美術社
- 「わが町きしへ」 吹田市立岸部第一小学校編
- 「神、人を喰らう」 六車由美著
- 「説話の宇宙」小松和彦著
- 「日本妖怪巡礼団」 荒俣宏 集英社
- 協力 ■
- 吉志部神社
- 吹田市立博物館